

東京清陵会だより

特集 今を生きる ① 平和への営み

報道カメラマンが今見つめているもの

…石川文洋氏(諏訪在住), 中村梧郎氏(62 回生)に聞く…



石川文洋氏(左)

1938年沖縄県那覇市首里に生まれる。毎日映画社を経て64年香港のスタジオ勤務。65年1月~68年12月ベトナムに滞在、アメリカ軍、南ベトナム政府軍に同行取材。帰国後、朝日新聞出版局のカメラマンとして活躍。日本写真協会年一度賞、JCJ特別賞等を受賞。

主な著書に、『戦場カメラマン』(朝日文庫)、『戦争はなぜ起こるのか-石川文洋のアフガニスタン』(冬青社)、『死んだらいけない』(日本経済新聞社)、『日本縦断徒歩の旅-65歳の挑戦』(岩波新書)他。

中村梧郎氏(右)

1940年北京生まれ、長野県岡谷市出身。70年より、インドシナ中心に報道カメラマンとして活躍。76年以降枯葉剤問題を継続的に取材。99~2004年岐阜大学(メディア論)教授。JCJ奨励賞、第8回伊奈信男賞等を受賞。

主な著書に『母は枯葉剤を目浴びた』(新潮文庫)、『この月書出たで見たカンボジア』(大月書店)、『環境百禍』(コーベム・アメリカ・韓国) (岩波書店)他。

中村さん、今日は報道カメラマンとして世界的に知られるお二人のお話しをお聞かせ頂ける機会を頂き感謝しております。中村さんの清陵時代から伺います。中村 原則男子校の時代で、女子は学年に数人しかおらず、互いに牽制しながら大事にしたという時代でした。質実剛健の伝統が残っていて弊衣破帽の気風と共に、独立独歩、自由な発想を重んずることがありました。当

お二人と清陵とのご縁

時、学友会は「原子雲」という会誌を発行し原水爆禁止を求める生徒の論文を特集しました。飲酒喫煙もコンパ室他でかなりやっていましたね。司会 沖繩ご出身の石川さんが、諏訪に移られて十年とのことですが。石川 沖繩から出てきて以来ずっと千葉県に住んでいました。朝日新聞退社を契機に沖繩に帰ることを考え、本部半島の備瀬に土地を得ることができました。しかし、仕事のことも考え当面は東京に近いところに住むことにしました。海は将来沖繩の本部に帰ればあ

第15号
編集・発行人
東京清陵会
(諏訪清陵高等学校同窓会)
東京支部
会長 林 尚孝
事務局 〒101-0047
千代田区内神田 3-24-5
神田シティホテル気付
TEL 03-5680-7633
FAX 03-5680-7665
E-mail: tseiry@papiacargo.co.jp

るから山の近くに住みたい。山といえは、高校二年の時、生まれて初めて登った山が霧ヶ峰でした。強清水から車山を経て白樺湖に下ったのですが、あの時は感動しました。今の住まいは、家を探しに行った八ヶ岳からの帰りに読んだ情報誌に載っていたもので、寄ってみたからカラマツ林の黄葉がきれいで、しかもすぐ隣に温泉がある。これはいいと住むことになりました。

中村 あそこは二葉に通う学生が歩く道で、私たちの世代にとっては聖域。そこに住むからには清陵の企画にもおつき合い頂かなくては、ということ。今回のお願いとなったわけです。

司会 諏訪は寒いですよ。石川 一度、水洗トイレの水溜が凍って割れてしまい、驚きました。でも、そこになぜ住んでいるかというところ、まずその四季がいいですね。香港に一年、ベトナムに四年住んで日本を見直したのは四季の美しさでした。沖繩にも四季はない。諏訪は半年は冬ですが、それだけに春が来るといいですね。結果的に諏訪を選んで良かったと思います。

戦争の記憶の風化

司会 本題に入ります。日本では戦争体験の風化が指摘されていますが。石川 日本で一番問題なのは、日本の戦争がどういふものであったのか総括できていないことだと思います。政府としても考えをはっきり出していない

対談は、二〇〇四年六月一日に行われ、司会は森史朗(七一回)が担当した。

2004年度 東京清陵会定期総会案内

日時 2004年10月15日(金) 午後6時~午後8時30分 (午後5時から受付開始)

場所 アルカディア市ヶ谷(私学会館)3F「富士の間」
東京都千代田区九段北4-2-25 Tel 03-3261-9921
市ヶ谷駅(JR, 東京メトロ有楽町線, 南北線, 都営新宿線, 下車 徒歩2分)

議題 ① 2003年度会務報告, 決算報告
② 2004年度事業計画, 予算案

③ 役員改選について
④ その他
懇親会 会費 8000円 (学生は4000円)
* 当番幹事 71回生, 次期当番 72回生, サブ幹事 81回生, 91回生。
ご面倒ですが出席, 欠席いずれの場合でも同封の返信用葉書にご記入の上, 9月30日必着にてご返送ください。

し、とくに教育の中で日本の戦争がどうだったのが教えられていない。そして、そうした教育を受けた子供たちが、教師になり、親になっていく。だから、小泉首相が靖国神社に行ったりしても、本人も自覚はないし、周辺の人が見ても不自然に映らないということになる。私は、イラクへ自衛隊を送っているのは小泉首相ではなく、日本人全体だと思っています。世界第二位の軍事力を持つ自衛隊を育てたのはほかでもない日本人みんなです。自衛隊をここまで育ててしまえば当然イラクにも行くようになるわけです。憲法第九条ができたときには、戦争が終わったばかりだったので、それぞれ個人の気持ちの中で戦争の総括はできていた。しかし、来年で戦後六十年ですが、これだけ経つと個々の気持ちも薄くなり、亡くなっている方もおり、戦争の記憶は風化してきた。だから、今からでも日本の戦争がどういうものであったのかをきちっとすべきだと思います。

中村 今、戦争をやる「普通の国」



水田の魚は子供たちのもの、子供たちはのびのびとしていた。ベトナム、タイビン省、1972年 撮影：石川文洋

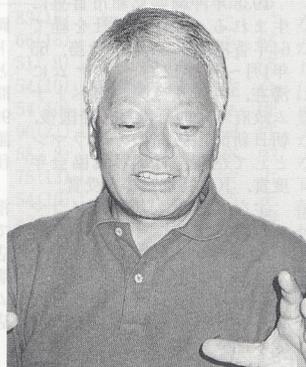
になるんだという発想自体がとてつもなくおかしい。そういう方向に細かいところで一つずつステップアップしていく動きに、どれだけ敏感になれるかが問われています。その点で大手メディアの論調を見ていると歯がゆい。

戦争の現実

司会 お二人は戦争の悲惨さをご覧になってきました。

中村 兵器は人をいかに効率よく残虐に殺すかを考えて作られたものです。そして戦争の度に新兵器の実験的使用が行われてきた。日本への原爆投下も一例。ベトナム戦争で使用された枯葉剤は食糧を絶ち、森林を枯らすことを目的とした化学兵器でしたが、途中で人体に有害なダイオキシンが含まれていくことがわかった。ところがわかってからますます散布量を増やした。その結果、次の次の世代にまでも影響があるという事態になった。戦争というものに幻想を抱いてはいけない。正義の戦争などあり得ません。

司会 戦場で自分の理性を維持している



石川 戦争は殺人です。戦争の中で理性を保つのは不可能。戦場や監獄での非人道的行為が問題となっていますが、私自身も兵隊になれば殺人や虐待をすると思っています。人間の残酷な本性は相手を人間と思わなくなるところに出てきます。そこには憎悪を増長させる差別観がある。だからそういう状況に陥らないためにはどうするか。私は防衛のためのものも含めて軍隊を持たないことだと思っています。そのためにも、戦争の総括と共に、戦争の残酷さを知ることが必要だと思います。

戦場からしか平和は見えないか

司会 戦場について初めて平和の尊さが見えてくるものなのでしょうか。

中村 戦争体験はなくとも平和の尊さ、戦争の愚かさは理解できる。他者の苦痛を感じとれるか否かが問われることなのです。戦争は我々の倫理観や道徳観の対極にあります。今、我々には平和の中にあるという感覚がありませんが、それはいつ壊れるかわかりません。リストラや、自分の家族の平和さを守れないという社会にいるわけなの

特集「今を生きる」について

ジョン・レノン「イマジン」で、天国も地獄もない、「人はみんな今の世界に生きているんだ」と唱った。ピーター・ウイアー監督の映画「今を生きる」で、主演のロビン・ウィリアムズは校則と家族の期待に縛られた寄宿学校の生徒たちに、「今をつかめ(生きよ)」という詩の言葉を教えた。そして「自ら反みて縮くんば、千萬人と雖も吾往かん」と念じた清陵生には、自らの生を迫及する姿があった。今日、「社会が大きな転換点を迎えている」という時代認識は広く共有されている。今回の編集担当七一回生は、新たな社会は「自立」と「共生」の社会であり、自己の生への実感、他者の生への共感にこそ、自立・共生の社会を築いていく原動力があるのではないかと考えた。「今を生きる」という言葉にはそうした思いが込められている。私たちは「今を生きる」というテーマの下に三つのサブテーマを設定した。最初のサブテーマは「平和への営み」である。二十世紀に人類は二度にわたる世界戦争を経験し、その後も冷戦を背景とした地域紛争と核兵器の脅

威の下で戦火の止むことのない時代を生きてきた。二十世紀の終わりにはその冷戦構造が崩れたにも関わらず、地域紛争が新たな拡がりを見せ、二十一世紀に入るや米国での「九・一一」テロを契機にある意味で世界中が戦場となる状況がもたらされてしまった。平和は、自立した生活の基礎をなすものである。ここでは、様々な場所で仕事をし、生活をしている清陵の同窓生が、広い意味での「平和への営み」にどのように取り組んでいるかを紹介した。

第二のサブテーマは「同窓生は今」である。「今一番大切だと思っていること」について、俳句や川柳、短文で、五八名の同窓生に語って頂いた。第三のサブテーマ「清陵生は今」では、現在教職に就いている二人の七一回生が清陵高校を一日訪問し、清陵生と清陵高校がこの変動の時代をどう生きようとしているのかをルポルタージュした。

こうしたテーマを考えたとき、報道カメラマンとして世界を見てきた石川文洋、中村梧郎両氏の対談を特集の冒頭に得ることができたのは大変幸運であった。さあ、共に、今を生きていこう。

ニスタンのカブールや農村は徹底的に破壊されました。他国の状況に関心を持つことにより日本の平和を知ることがあります。そこにジャーナリストの役割があります。では、日本人は平和を守るための努力をしているかという

疑問です。日本縦断中に総選挙がありました。護憲政界は惨敗でした。やはり、人々は戦争の悲惨さにも、平和の尊さにも鈍感になってきています。

子供たち

司会 戦場の子供たちを見てきて、日本の子供たちをどうお思いですか。

石川 ベトナムの子供たちに感じたのはバイタリティーの強さでした。その原因は、恵まれた自然の中で遊んでいることと、旺盛な好奇心にあります。

一方、日本を歩いていると、子供たちが周囲の動きに対し、しらけているところがあると思えました。子供に好奇心がないように感じました。

これは多くの情報をたれ流しにするテレビの影響が大きいと思います。外で遊んでいる子が少ないのも気になりました。

司会 中村さんはベトちゃん、ドクちゃんには深く関わられました。

中村 一九八一年に初めて出会った時には、この子供たちは生き延びられまいと思えました。その後分離手術に成功します。一方、二人のことがテレビ等で報道されることに対し、このような子を生き延びさせ、報道に晒すことは非人道的だという批判ができました。生きていることも見ることもならないのか。その見解には優生思想やハンディを持った人への差別意識がある。分離手術後、ベトは寝たきりですがドクは学校にも行き、片足でサッカーもできる。昨年会ったときは、これからデートだと話していました。

ベトナム戦争から見えるもの

司会 ベトナム戦争でベトナム人は「グウク(黄色人種を指す蔑称)」と呼ばれ、今は、アラブ人が「ハッジ」と呼ばれています。

中村 当時の海兵隊員の手記によると、入営の日に、上官が目前でウサギの両足を持って引き裂き、「グウクはこういう目にあわせなければならぬ」と教える。けだものなのだ。

司会 ベトナム戦争を身近に見てこられた方として、今日のイラク戦争に見えてくるものは何でしょうか。

石川 戦争の残酷さという点ではどの戦争でも同じです。しかも兵士達に悪いことをしているという意識がないのも同様です。泥沼化という点ではイラクの方が深刻だと思います。どちら

も傀儡政権を利用した新植民地主義の戦争ですが、イラク統治評議会にしろ、暫定政権にしろ、ベトナム戦争当時の南ベトナム政府、北ベトナム政府に比べ政権基盤が弱い。アメリカにとって撤退の道を探すのは容易ではないと思います。

中村 米国メディアでは大量破壊兵器が発見されなかったことについて、誤った情報提供をしたとして自己批判の記事を書き始めている。日本でも、ブッシュがあると言うからあるんだという路線でメディアも権力もやってきたことへの、きちんとした総括が必要で

す。ベトナム戦争では自由に取材をさせたのが失敗だったとして、レーガン政権は軍隊への取材を規制(ディーバー・ルール)しました。それをいつそ

う強めたのが今度の自衛隊派遣取材ルール。サマーワの自衛隊を批判する記事はそこからは出てこない。亡くなった橋田さんのようなフリーのジャーナリストからしか出てきません。

日本という国

司会 石川さん、一九六四年に日本を出国した契機には当時の日本への絶望があったと書かれています。

石川 日本への絶望というよりも、外国を見たいという気持ちが強かった。豊かさのアメリカにあこがれて日本を出たが、途中のベト

ナムで醜いアメリカを見てしまったということになります。六〇年安保当時の日本社会への失望感というものもありました。

司会 ダイオキシシン問題での日本の政府や企業のあり方はどうでしょう。

中村 ダイオキシシン問題はベトナム戦争を通じて世界的に知られることになりました。一九七六年、イタリアのセブソでの化学工場爆発事故以来、欧州



では徹底して規制の手がうたれてきた。日本ではセブソの事故を知りながら、ほぼ二〇年放置した。九〇年代末になってようやく規制が始まったが、ゴミ焼却方式に固執する日本のやり方では問題は解決しません。焼却炉内での発生は抑制できても、煙道などでの再合成・発生は防げず、バグフィルタで飛灰を漉し取ったとしても、ダイオキシシンだらけの灰はダンブカーで運ばれ処分場に捨てられています。

自身の生としてのカメラマン人生

……柳沢武司氏(六一回)との出会いとその死

司会 なぜ戦場に行くのか。そこには「生」の実感があつたとおっしゃっていますか。

石川 ビッタリした言葉が見つからないのですが、それは好奇心ですね。訴えるとか、戦争を中止させるなどの正義感、使命感は、あまりありません。今でもイラクに行きたいと思えますが、写真を撮るといよりは、イラクがどういう状況になっているか知りたいという気持ちが強いですね。

司会 カンボジアで亡くなられた柳沢武司さんは清陵で中村さんの一年先輩でいらっしやいました。

中村 彼は、学友会の会長もやっていました。演説に説得力があり、信頼も厚かった。大学の受験に失敗した後、東映の撮影部にいて、私が東京に出たときは、世田谷にいた彼の四畳半に転がり込みました。六〇年安保の最中でしたが、彼から、働きつつ大学に行くのも良いぞと言われ、アジア通信社に入社、写真記者としてこの道に入りました。一九七〇年三月にロンノル政権ができた頃、諏訪で二人で呑み、彼が一足先にNDN特派員でカンボジアに入った。私は四月末にカイロで開かれたインドシナ人民支援国際会議の取材に行き、そこで記者証の発行を待っている間に「柳沢武司、カンボジアで前方不明」というUPIのテレックス第一報を偶然見た。取材中にポルポト派に捕まり殺されたのです。

司会 最近では報道の世界にまで「自己責任論」が言われてきています。

石川 危険だからフリーのジャーナリストが行くんですよ。危険がなければ新聞社がやる。戦争を防ぐためには、戦争の実態を知らなければいけない。

その為には現場に行かなければならぬ。しかし組織にいたのでは規制があるので、フリーの人が行くことになってきている。事実を伝えていく上で、その仕事は大切です。事実を隠したい政府がフリーのジャーナリストを批判することは仕方ないとしても、マスコミがそれを批判してはいけません。その人達の仕事を評価していかないと、戦前のように戦争の実態が知らされなくなってしまう。

今をどう生きていくか

司会 最後に、今を、或いはこれからをどう生きていくかということについて、一言お願い致します。

中村 自分の関心をさらに広げながらより深めていけると、良き人生を全うできるのではないかと思います。実事求是。今を生きている自分の、関心と興味のままにやってみれば、結果として、十年、二十年経って「歴史に触れていた」というようなことも起きたりするのでないでしょうか。

司会 石川さんは、平和運動にも積極的に参加されています。

石川 ベトナム、カンボジア、ボスニア、ソマリア、アフガニスタンの戦争を見ってきました。今、沖縄戦の取材もしています。こうしたことを次の世代に伝えて行くことは自分の義務だと、今は思っています。そして、経験を生かしながら、新しいものも見ていきたいと思っています。

司会 ありがとうございます。

"Imagine"

作詞・作曲 John Lennon

Imagine there's no heaven
It's easy if you try
No hell below us
Above us only sky
Imagine all the people
Living for today, , , ,

Imagine there's no countries
It isn't hard to do
Nothing to kill or die for
No religion too
Imagine all the people
Living life in peace, , , ,

Imagine no possessions
I wonder if you can
No need for greed or hunger
A brotherhood of man
Imagine all the people
Sharing all the world, , , ,

You may say I'm a dreamer
But I'm not the only one
I hope someday you'll join us
And the world will be as one

(JASRAC)

バンングラデシュとの十四年

・ ・ ・ 支援から「人々の物語」の分かち合いへ

林 澄子(七一回) バングラデシュ鳥取の会



ことの起り

「バンングラデシュ・鳥取の会」は一九九〇年七月、私の三人の子供が通った幼稚園の母親の有志数人の呼びかけにより、バンングラデシュの最下層の子供たちの教育を支える目的で発足した。現在会員四〇名、十四年目の活動に入っている。きっかけは毎年行われている教会と幼稚園の合同バザーの反省にあった。

一九八八年、休暇で滞在していたO牧師が、バザー当日、食券売り場の机の上にアジアの子供たちの窮状をアピールして欲しいと、「アジア友の会」

の募金箱と子供の笑顔のポスターを置いていった。バザーの賑わいの一方で、その募金箱とポスターに心を留める人はほとんどいなかった。反省会でバザーの目的に対する問いかけが起こり、有志数人が集まって改めてO牧師からバンングラデシュで貧しい人々と共に分かち合っているテゼ共同体のブラザー(修道士)たちの働きを知ることになった。一か月に十ドルあれば子供ひとり働かなくて学校に通えるところ、会費、寄付、バザーにより年間二千ドルを捻出、代表者ブラザー・フランクを通して送金している。

南の国バンングラデシュ

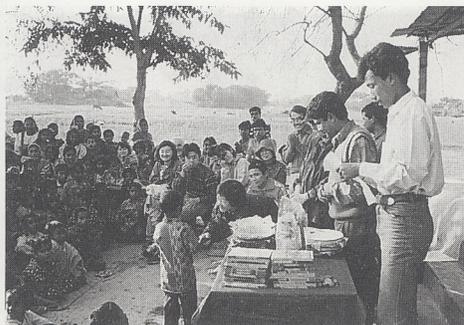
北海道の一・八倍の面積に日本と同じ一億二千万人の人口を有するバンングラデシュ。教育を受けた中間層が長らく欠落し、わずか数%のエリートの人々が政治経済を握り、これに先進諸外国のODAやNGOが関わることで構造的な貧困が形成されている。八七

%がイスラム教徒でベンガル人である。少数者としてヒンドゥ教徒、国境周辺の丘陵地に佛教徒、キリスト教徒などが居住する多様な文化を持つ国である。少数民族とベンガル人との間で様々な葛藤や差別が存在する。雨季の洪水やサイクロンの自然災害は有名である。

バンングラデシュで出あった人々

一九九七〜九八年の年末年始に、私は首都ダッカから北西二二〇kmに位置するブラザーの居住地マイメンシン(県庁所在地)と、インド国境に近いシレット県のカシ族、首都ダッカを訪

ピンバラ小学校で皆勤賞を渡す筆者。白いシャツの青年はトボン先生。一九九八年



問した。二〇kgのバックバックに寝袋の一昔前の登山スタイルで、村の学校の寄宿舎や教会の床に泊まった。朝晩は冷える。摂氏六度の気温で路上生活者の死が報道されていた。

川向うにカーブ制度の社会で最下層の人々のピンバラ(乳搾りを職業とする人の村の意味)小学校を訪ねた。

その日は卒業式で、約二五〇人の村人総出で祝った。卒業記念品は本。皆勤賞はランプや皿。これは学校に子供を通わせた親に対する賞なのだろう。子供たちが民族舞踊や詩の暗誦を披露してくれた。大詩人タゴールを育んだ風土に対する人々の誇りを感じた。トポンはパートタイムの学生教師。自分が学んだことを村の子供たちに教え、給与は奨学金としてブラザーから受け取る。

マイメンシン駅脇の掘っ立て小屋はストリートチルドレンの小学校。普段は大人顔負けに働き、ときには盗みも仕事としている子供たちも、訪問者を迎え嬉しくて、かまってくれなかった。日常生活を描いた劇で歓迎してくれた。「大きな栗の木の下で」をみんなで合唱して別れ際、夕暮れの中を「有難う」を伝えるに後を追ってきた女の子がいた。心が熱くなった。

日本の小規模作業所に似た障害者コミュニティセンターを訪ねた。所長は青年ラブロ。男女の若者がボランティアとして関わり、人の温もりを感じた。白い帽子にバンジャビ姿のチャチャさんは遠く離れた村の長老で熱心なイスラム教徒。腰が曲がって高齢だが、

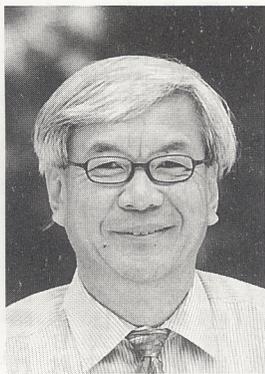
困った時に適切な助言を与えてくれる
ブラザーの大切な友人。ブラザーの
ところに集まってくる人々と共にお茶を
囲み、宗教や国境を越えてお互いの話
に耳を傾ける時を多く持った。

支援から「人々の物語」の分かち合いへ
ブラザー・フランクは、現地の人々の
日常を事細かに記した「現地便り」
を頻繁に送って来る。バンングラデシ
の貧しい人々の中に身を置き、共に歩
んで三十年と聞いて脱帽である。私が
十四年の支援活動の過程から教えられ
たことは、彼の現地便りに登場する、

高校生と「生」に向き合って

……歌は命を謳う

名取 芳夫(七二回 高校教諭・カウンセラー)



何でだろう、この世に私が生きること

答えを探しに生まれたのかな

菅原靖子・二〇〇四年編纂東洋大学

「現代学生百人一首」入選作品

授業で自分の想いを短歌に詠むこと

を呼びかけた。思いの外多くの作品が

寄せられた。作品には「生きる喜び」

「命を愛おしむ」心が溢れている。

C・R・ロジャースの基本的人間観

社会から忘れ去られてきた「貧しい
人々の物語」を丁寧に読むこと。する
と私の中にも彼らと同じような喜びや
悲しみ、葛藤を発見して共感するので
ある。「人間家族」という言葉をブラ
ザーは好んで使う。国際協力で主眼を
置いているうちはこの視座を心から理
解していなかった。分かち合うとは生
き方においてであったのだ。「貧しい
人々の物語」を私の友人たちに伝えて
行こう。主婦の試みではあるが、私
はここにはかなかな光を感じている。

『人は成長へと向かう基本的欲求を持
っている』の実例に触れさせてくれ
る。

菅原さんの歌は、柔らかなトーンで
「生」の意味を問い掛けながら、生き
ることを阻害するものへの強い抵抗と
して響く。「生まれる」とは「生きる」
ため以外の何ものでもない。

雛菊よゆずれないものあるならば

咲き散りほこれ威風堂々

馬淵美示・二〇〇三年市川市ジュニア

短歌祭優秀賞作品

馬淵君は自分の生き様を雄々しく詠

み込んだ。小さな花の生命力に託し

て。自身の感覚が総ての経験に開かれ

ているとき「生きとし生けるもの」と

共鳴する。自己の命・他己の命をある
がままに受け止める時、自己の「生」
を全うする。他己の生も脅かさない。
馬淵君の歌の通奏低音を「自反而縮雖
千萬人吾往矣」が務める。

一言の言葉が私を支えてる

そんな人に出会えた喜び

渋谷友美・二〇〇三年市川市ジュニア

短歌祭最優秀賞作品

「今生きている」自分をそのまま受

け止めて貰えた時、成長へと向かう力

は十全に発揮される。この状態をロジ

ヤースは Full Function と呼ぶ。一言

の言葉に支えられて、そう実感でき

る渋谷さんは、同じように人を受け止

め、出会えた喜びはその人にシェアさ

れ、「今生きている喜び」が広がって

ゆく。

春風の頬を流れる木の下に

君待つ時の心地よく過ぐ

赤川健・二〇〇三年市川市ジュニア短

歌祭優秀賞作品

「生きていく実感」が持てる時、共

鳴・共感の世界は果てしなく広がる。

経験の世界も広がる。風・時の流れ、

総てが自分の命と響き合う。エネルギ

ーを注いでくれる。「命」が見えてく

る。木の下に君を待つ赤川君の醸し出

す雰囲気、映画「サウンド・オブ・

ミュージック」冒頭のジュリー・アン

ドリュースが重なる。アルプスのあら

ゆるエネルギーがマリア(ジュリー・

アンドリュース)に注がれ、彼女の五

感 は自然の総てに開かれていく。五感

総ての経験をそのまま受け入れる時
「命」が見える。命が見える時、命を
阻害するものを許しておけなくなる。
トラップ大佐に初めて会った時、子供
の命を阻害している彼としなやかに戦
う。あのしなやかさは、経験している

こと総てをそのまま受け入れられてい

るからこそ。そんな人に出会えた喜

び」が大佐を変え、男爵夫人を変え

る。ファミリーに迫る脅威もしなやか

に躲す。赤川君の佇まいもしなやか

だ。

夏日和友達とのむソーダ水

コップの中にすんだ青空

宮田かおる・二〇〇三年市川市ジュニ

ア短歌祭優秀賞作品

「宮田さんは静かに「命を共有」す

る。傍らの友と、ソーダ水と、コップ

の中のすんだ青空と。宮田さんも

「命」を見ている。友に、ソーダ水に、

コップに、青空に、そして流れゆく時

に。この空間では総てが親和的だ。総

ての命の親和感に包まれて、成長に向

無言の行進が生徒の胸に残したもの

……六〇年安保清陵全校デモへの参加者達

田中 満(七一回 ジャパンタイムズ)

「行進は粛々と行われました。無言

の行進でした。市民の反応はおおむ

ね好意的だったと記憶しています」。

清陵の歴史に残る一九六〇年の安保

反対デモの思い出を語るのは、清陵新

聞部長だった高木昭彦さん(六四回

かうエネルギーが静かに迸る。

グランドの汗と涙の結晶が

輝く未来につながってゆく

白水春菜・二〇〇三年市川市ジュニア

短歌祭佳作賞作品

汗と涙の結晶が見える白水さんに

は、健やかに成長を続ける「命の未

来」が見える。汗と涙の結晶は何もの

にも脅かされない。新たな汗と涙が更

に結晶を成長させ、揺るぎない未来を

作る。

生徒達の歌はどれも「命を謳う」。

命を謳えるのは、今経験していること

をそのまま受け入れられるから。経験

していることをそのまま表現できるか

ら。成長へと向かう力がそのまま進っ

ているから。何ものもその進りを阻害

することはできない。何ものもその命

を阻害することはできない。彼らと時

間と空間を共にしながら、謳う場に、

歌を詠む場に立ち会いながら、教えら

れている。「歌は命を謳う」もの。

生)だ。デモが行われたのは六月十七

日。安保新条約が国会で強行採決さ

れ、それを受けた全学連のデモで東大

生の樺美智子さんが圧死した二日後だ

った。

「安保反対とともに、強行採決とい

う手段をめぐって民主主義の問題も論議しました」と高木さん。

清陵での安保論議は前の年から始まっていた。社会部が清陵祭で取り上げると清陵新聞も安保問題を解説。談論のテーマとなり、平和に対する生徒の関心は高まった。そんな中で起きた国会での騒乱が清陵生をデモに駆り立てたのだ。強行採決に対し檄文を出そう、樺さんの死に抗議するため代表を送ろうといった案が真剣に討議された。「受験勉強もそっこのけで毎日討論に明け暮れていた」と言うのは六四回生の内田良子(旧姓有賀)さんだ。

「毎日のように体育館で全校集会がありました。私はノンポリの一般学生でしたが、朝から体育館に直行して夜遅くまで議論をしていた印象です。ですから授業は実質放棄。デモも、自分たちの意思を表明するためにしよう」と発展していったのだと思います。

学友会の副会長だった春日健児さん(六五回生)はこう回想する。

「デモの発案者は当時のオピニオンリーダーだった社会部と原水委で、全国的にデモは当たり前という雰囲気でした。少数ですが安保に賛成する生徒や討論会に来ない人もいました。そういう生徒には、賛成なら談論会で意見を述べたらと、校門で呼びかけました」

デモが学友会総会で決議されたのは樺さん死亡の翌日のこと。学校側から慎重論が出る中、樺さんの死を悼み、国会正常化を訴える市中行進が満場一致で可決された。学校側の条件は、授

業後、肅々と行うこと、学校行事として教職員も参加することなどだった。

「放課後、クラス別に並んで決められたルートどおりに行進しました。先生が書いたプラカード以外はなし、声も歌もなしです。八百人が参加しました。高校生のデモは長野県では初めてで、深志や長野、美須ヶ丘が続きました」と春日さん。同じく副会長だった川上孝之さん(六四回生)はこう言う。

「高校生らしく静かだまじめな行進を実施しました。いちおうの目的は達成したとの気持ちを持ちました」

清陵新聞の高木さんによると、「その後市民や卒業生から投書が十通来ました。感銘を受けたという声が多かったですね。高校生の跳ね上がりという批判もありました。行進のあと、図書館で新聞や『世界』に読みふける生徒が大勢いました。新聞を読まない今の高校生では考えられません。市中行進をピークとする清陵の安保は、生徒の胸に何を残したか。清陵で



教鞭を取られた高木さんの場合は、「安保をめぐって新聞記事がいかに頼りにならないか痛感しました。現場の記者が書いたものをデスクが変えてしまう。安保を境に新聞から距離をおくようになりマスコミに進む気持ちもなくなりしました。もつと手作りの感覚を求めて教師の道を選んだんです」

一方、現在教育相談カウンセラーとして活躍中の内田さんは、東京女子大で清陵魂をいかに発揮した。「長野県の人は学生運動をするというイメージがあって、諏訪清陵だと言うと当然すると思われました。運動の目的は、解散させられた学友会の再建で、寮を拠点に活動をしました。物事を真剣に考えて行動する、というのが清陵生ならではの思いです」

安保反対で集結した清陵生たちは、今の安保体制をどう見ているのだろうか。東京外語大でロシア語を専攻、ソ連にあこがれていたという春日さんは、「今では結構安保に賛成になりました。学生時代にソ連の実情を見て回るとソ連像が大きく変わったんです。あこがれの国が逆になった。日本が東ドイッの二の舞になっていったかと思うと、安保路線でよかったと思っています」

副会長だった川上さんはこう語る。「日本の現在の繁栄は日米安保の上に乗ったことは紛れもない事実。これを評価した上で、今後のあり方を議論する必要があります」

無言の行進から七年後の一九六七年十月、安保闘争が再燃する中、上諏訪

駅前で清陵生による小さなデモが行われた。ベトナム反対、安保反対を叫んだのは、筆者を含む三人の社会思想研究会の部員だ。市中行進と無届デモを

中東情勢を四十年ウオッチして

問題の根源は石油に

伊藤 力司(五六回 ジャーナリスト)



比べるべくもないが、七年の歳月は清陵生の覇気を変えるに十分な時間だったようだ。

私が関西で三年間の記者修行を終えて共同通信社外信部に配属されたのは一九六一年春のことだった。それから四十三年間国際情勢をフォローしてきた。現役時代最も夢中で取材したのはベトナム戦争と和平交渉などインドシナ問題だったが、この間中東問題は常に念頭を去らなかつた。イラク戦争、パレスチナ紛争を見るまでもなく、中東こそ二〇世紀後半から二一世紀にかけて世界で最も深刻かつ長期の紛争地点だからである。紛争の根源は、ペルシヤ湾岸とカスピ海という二大石油資源地域にある。

再びパリでベトナム和平交渉を追いかけていた七三年五月、日本赤軍の決死隊がパレスチナ支援のためにイスラエル・ロッド空港で乱射事件を起こした。パリからロッド空港に飛んだ私は初めてイスラエルという国、そこに住む勝者のユダヤ人と敗者のパレスチナ人に接した。東エルサレムで貧しいパレスチナ人の若者たちが、日本赤軍を讃えて日本人の私に親愛の情を示した記憶は今も鮮明だ。同年十月の第四次中東戦争では再びイスラエル入りして戦況報道に当たったが、アラブ産油国のイスラエル支援国に対する石油禁輸

外信部にはいくつもの地域研究部会があり、新人の私は中東部会を志望した。当時は五六年にスエズ運河国有化に成功したエジプトのナセル大統領がアラブを「覚醒」中であり、五八年に

アラブ革命でカセム將軍が王制を打倒した興奮が冷めていなかった。やがて六七年の第三次中東戦争でアラブ陣営がイスラエルに大敗、ヨルダン川西岸とガザ、ゴラン高原などが占領され、ナセルに失意の時代が訪れる。当時私はパリでユダヤ人、アラブ人と付き合っていたが、五六年のスエズ戦争(第二次中東戦争)で自信をつけたアラブ人が元気をなくし、逆にイスラエルが拡張主義に走り出す気配が感じられたものだ。

という大戦略が発動された。その結果石油ショックが起きた。にもかかわらず、緒戦は攻勢に出たアラブ陣営が結局イスラエルに勝てなかった。このことがエジプト・イスラエルの単独和平(七九年)をもたらした。その結果アラブ陣営対イスラエルという中東戦争のパターンはなくなった。だがそれだけパレスチナ紛争の解決は難しくなったわけだ。

パレスチナ紛争は基本的には土地争いである。二千年の間世界各地に流浪したユダヤ人が父祖の地に建国するとシオニズム運動。しかしそこには代々パレスチナ人が住んでおり、彼らを追いつきなければならなかった。四次にわたる中東戦争はパレスチナ人追い出しに役立った。追い出されたパレスチナ人の抵抗が終わることはない。ユダヤ人を迫害してきたキリスト教社会の欧州は、ナチスによるユダヤ人大虐殺への贖罪意識もあってイスラエルを支援した。迫害を逃れて欧州から米国内に渡ったユダヤ人は「反ユダヤ主義」と闘う中で強力なユダヤ・ロビーを構築し、米国内政・外交に多大な影響力を発揮する。かくて米国はアラブ世界を分割統治・無力化するのに、中東の唯一の同盟国イスラエルをフル活用するようになる。パレスチナ人を虐殺するイスラエルのシャロン首相をブッシュ大統領が「平和の使徒」と讃えるのは、こうした米・イスラエル特殊関係だからだ。

こうしたアルカイダを支援している。なごの、イラク侵攻の大義は崩れ去った。イラク四人への拷問、虐待の人権蹂躞を見ると「文明社会が中東に民主主義をもたらす」という新たな大義も信じられなくなった。「石油ロビーがホワイトハウス入りした」ブッシュ政権がイラク戦争を始めた本当の理由はもちろん石油である。それは単に世界第二の埋蔵量を誇るイラクの石油だけでなくペルシヤ湾岸全体の石油をにら

バッファロー、二〇〇三・一・一五

有井 行夫(七二回 駒澤大学教授)



二〇〇二年五月、ダウンタウンの安バー。「あんた、九・一一をどう考えるかね」、白人の酔客の一人が近寄って議論をふきかけてきた。危険だ、からまれる、サイモンがとつさに判断したのだ。私たちは、ビールの勢いであまりに無防備に声高にこの国の政治について喋りすぎた。

二〇〇二年四月から二〇〇四年三月まで、ニューヨーク州立大学バッファロー校哲学科に滞在した。バッファローは、ニューヨーク・シティー西方七〇〇キロ、エリー湖畔、人口三〇万の旧産業都市。イラク戦争に関するアメリカ市民の感情表現の変化をニューヨーク州の片田舎で体験した。

「ユキ、店を変えよう」、サイモン(州立大学生)が私の腕をつかんだ。

る批判の契機が欠落しており、教授の日常の言動からすれば、アメリカ主義への過剰なまでの配慮に思われた。二〇〇二年九月一日。バッファローの平和団体主催の慰霊集会在デラウェア公園内、ホイト湖畔で開かれた。慰霊に名を借りた政治的平和集会。慰霊に名を借りなければ、開くことすらできなかったささやかな平和集会。参加者総数、五〇名。

一年が明けて、対イラク開戦がわかりに現実味を増すなかで、バッファローの反戦運動が全米、全世界の運動と急速に連結してきた。

二〇〇三年一月。経済学科の筋金入りのマルクス主義者、Z教授からイラク戦争開戦反対のポスターを私の研究室の外側に貼り出すように依頼され、引き受けた。私の研究室は哲学科の廊下の突き当たり、非常に目立つ。Z教授、「こいつは、いい、いい。」私、「よくない、よくない。」

果たして、翌日、哲学科の事務職員二人がドアをノックした。「ユキ、ポスターを貼ったのは学生だろう。ならば私たちがががそう。」「貼ったのは、私自身。ゆえにはががに及ばず。」やりとりはこれだけ。ただ、それ以後、学科の事務職員たちは、私と口をきかなくなつた。哲学科の教授たちの私に對する表情がたかくなつた。

二〇〇三年二月一日、国際反戦行動デーが近づいてきた。全米の反戦勢力が行動デーの呼びかけに連動し顕在

化した。州立大でも反戦アクティヴィストが一気に顕在化した。Eメールが飛び交い、小政治集会、学内デモ、映画会が頻繁にもたれた。戦争賛成派と戦争反対派の教授たちの公開討論会が開かれ、反対派が賛成派を圧倒した。何人かの教授たちは、授業の中で学生たちに行動参加を呼びかけた。英文科のH教授は、「反戦行動はアメリカ民主主義の名譽である。反戦行動による不当逮捕は民主主義的個人の名譽である。私は、諸君に逮捕のされ方を教えよう」と学生たちにEメールを打った。

二月一日、ニューヨーク・シティー一反戦デモ一〇万人。州立大からは、実行委員会がバス三台をチャーターし、学生一〇〇名以上が深夜片道一〇時間をかけてNYCデモに参加した。当日、学内集会、バッファロー・ダウンタウン、デモ、二〇〇名。

二・一五を境にして、反戦平和は、アメリカ社会において再び市民権を得た。バッファローでもそうである。反戦平和は、一握りの「反社会的分子」、「反アメリカ分子」の妄言ではなくなり、顕在化した社会的オブションとなった。まことに奇妙なことだが、この日に境に、哲学科事務職員に私に對する態度もポスター事件の以前のものに復した。ポスターに表現された私の思想がダイレクトに承認されたわけではもちろんないが、社会的常識の範囲内の一つのオブションとして承認されたのだ。

特集 今を生きる

②同窓生は今

「東に高さ八ヶ岳」を

もう一度高唱したいな

「今、最も大切だと思っていること」を
五人の同窓生にうかがいました

三月の編集会議にて、「今、最も大切だと思っていること」をテーマに同窓生の皆様の一言を紹介するという本企画がスタート。「寄稿のお願い」の葉書を、二六〇〇〇回生、二六〇〇名の方に発送したのが四月。六月中旬までに二六〇〇〇回生の五八名の方から心のこもった返信を頂戴することができました。葉書が到着した翌朝、通勤電車の中で「東に高さ八ヶ岳・」と密かに口ずさんでいる自分に恥ずかしさを感じながら、清陵に思いを馳せる日々でありました。一通一通の「今」に感動しながらの編集、そしてこの発行を迎えることができ、無上の喜びでございます。感謝と御礼を申し上げます。

(七一回生編集担当者丸茂敏、磯野康子)

有賀 博 26回生

私は旧制中学五年制時代の卒業生。もう学友は殆んど没している。東に高さ八ヶ岳を今一度高唱したいな。

三井 壽 31回生

長寿の秘訣、それは禁煙です。何回となく死線を越えてきた本人が証拠です。あきらめず、今日一日を大切に。

濱 真喜男 34回生

天にまします我らの父よ 願わくは
み名を崇めさせたまえ 万国を来らせ
たまえ みこころの天になるごとく地
にもなさせたまえ

のみ、先送りすることが可能。戦争などは愚。

藤森 千史 38回生

○松まがり竹は直にためてたかり
○いたづらに過ぎにし年の徳ばるる
春の花つみ秋の七草

岩波 重吉 40回生

昭和九年着任の国語の井上敏夫先生(埼玉大名誉教授)は平成十六年一月逝去された。誠に良き先生でした。先生の遺作の一句「花八手蛇遊ばせて夕となる」

土橋 久男 40回生

諏訪尚武館生に戦中の話をしたところ小六の館生から何故日本は戦争をしたのですかと。時選り世は変わっている。

平沢 茂満 40回生

夫婦になって五十五年 金婚祝いをしてもいい、妻は今年八十歳になる。梅見に行つて一句。

白梅を愛でて笑顔の妻傘寿

私は八十三歳になる。八十歳になった時の一句がある。

片蔭を渡り続けて傘寿たり

夫婦共に健康に留意して米寿迄生きたい。毎朝三十分歩いてラヂオ体操をして帰るのが私の健康日課である。

清水 孝悦 41回生

内外、平穏とは逆方向の世の中、往時、清陵諏訪の地にて雄大剛健、青春を謳歌した過去を止揚して、新老人青春時代を立ち上げ、あるがままに、世の常の栄かあらず、名かあらず、黄金かあらず、我が党の尚ぶ所、何かそ

も唯志!! これぞ新老人青春時代の鏡

として、あるがままの生活を享受せんと想う昨今ならん哉!!

山本 哲朗 41回生

ふるさとの木やりにさめる旅枕
デッキカい事した二十世紀
大戦、原子爆弾、月探検
二十一世紀は新人お任せ

岩波 正雄 43回生

八十路に入り、体力の衰を二入感じようになった。年に一度のクラス会に友人の数も段々減ってきた。健康第一、頑張れ。

鮎澤 真澄 44回生

○諏訪上社里曳き三日
八本の御柱の立つ七九の祝日
(二〇〇四・五・四九歳誕生日)
○諏訪つ子の根性育てる
御柱祭真澄正宗鯉の甘露煮

五味 誠 44回生

同窓会のお世話ご苦労様です。昭和十三年入学の年に御柱祭がありました。それから六十六年目の「御柱」長く生きたものです。まだ元気にやっております。ご盛会をお祈り申し上げます。

三井 和夫 44回生

五十四年間の教職生活を去つて丸四十年。現在余りにも多い若年層の凶悪事件に心を痛めています。学校教育が悪いのか、親の放任・無関心が悪いのか、一億総反省の時ではないでしょうか。

今井 保徳 45回生

南仏旅行所感二首
○ポルドーの畑の小石陽に暖まり
ブドー熟成夜も休まず

(第二の人生、少しでも世の中に役立てば)

○フレバー、アロマ、ブーケにフルボデー

高級ワインの自由な評価
(何事も批評はする方が楽)

林 四郎 45回生

一、新憲法の制定
(マッカーサー憲法からの脱却)
二、国民皆ボランティア制度の新設と参加義務化
(共助共生社会の構築)

北原 正信 46回生

喜寿を迎えるこの歳になって諏訪中時代を最も懐しく思う。後輩諸君よ、意義深き青年時代を送られんことを!

小泉 和明 46回生

私達は毎年同期生会報で自分の今の健康状態今後の暮し方等で親交を計っています。喜寿を迎え尚皆気概充実です。

荒井 宏明 47回生

喜寿近く
故郷遠くなりけり
なつかしの山
なつかしの湖

萩原 伸 48回生

自衛隊千人針の今様は
黄のハンカチを胸に秘め行く
(イラク派遣に際し)

渡辺 誠 48回生

○寂として老人ホーム桜満つ
(十四・六・二「日経俳壇」藤田淋子先生選句)
○神田川一夜のうちの花筏
(二五・四・二七 同右)

○あの辺り妻の病室蟬しぐれ
(一四・九・一「日経俳壇」黒田杏子先生選句)

○臥す妻を頼りに炊きしきのこ飯
(二四・一一・三 同右)

会津 洋 49回生

国破れて山河あり、と言うが疎開学生だった私が一番愛するのは富士見に立った自分を囲む変らぬ山々の姿である。

小松 忠義 49回生

鶏鳴に薄氷すこし弛みけり 忠義
行く春の瀬音拾ひし広瀬川

瀧の音撫み大岩揺るぎなし
祈りにも似て秋耕の翁かな

小泉 作一 50回生 般若同人
死ぬ、という絶体絶命がある限り、人間に平安はやって来ない。人皆の命亡ばば亡ぶべし、己が命に恙あらずな。

中島 英幸 50回生
早苗田の水を濁して蝌蚪走り仏の瞑想
長き昼過ぎ(万治の石仏)

温まる水田の底に己が影を移動させつつ蝌蚪ら楽しげ
峡の田に座す石仏の肩に乗り甲羅干しせし少年の夏

矢島 圭一郎 50回生
古希過ぎて残る人生思ったびわが学び舎の懐かしき
若き日の想ひいままお胸に秘め故郷の人惚ぶこの頃

矢崎 新一 50回生
寒き闇赤き篝火大嘗祭
凍解に支えし老母の手の軽く

落人の跡訪ね行く芒道

小松 袈伴 51回生

週末には山登りとゴルフという生活です。編集者より二〇年上ですが、私の会社では若返りの化粧品を製造して、その化粧品を使っていると確かに若返ると信じています。どうぞ験してみて下さい。

堀内 昭八 51回生

平和と健康―母校入学の年から半世紀余、戦争のない国に健康で楽しく生きられた幸せは、何事にもかえがたい。

山森 典武 51回生

MMK(モテテモテテコマル)友人・家族・親戚・異性等から愛されPK(ピンピンコロリ)余生堂々黄金の人生

矢崎 光保 52回生

日常の診療の傍ら、「市川市七十歳以上の医師の会」幹事として、親睦を高めるよう日頃腐心しています。

青木 瑞枝 56回生

世界の平和、個人的には身体と心の健康、身体障害者でも、心の健やかさが大事と日々の診療で感じている。
(眼科開業現役)

津金 眞 56回生

かなかなの澄みし声あり目覚めても、この句は地方新聞「アサヒタウンズ」に特選句として掲載されたものです。

守矢 徹生 56回生

揺れる世も心に華のある暮らし
長寿の世理想の花の咲くチャンス
自分より不幸な人を忘れな

横田 健次 57回生

「毎日を生きたること」20数年前私は事故で40日間の意識不明に陥った。その時清陵校歌を唱った旧友の声で意識回復した。嘘のような本当の話。以後「毎日を元気で生きる」がモットー

堀田 裕人 58回生

定年退職後、学生寮長善館の世話役をしていたが狭心症の発作でこれも引退。そこで狂歌一首。
心臓の病得て知る薬の名
アイトロールにヘルベッサ―R
(アイトロールもヘルベッサ―Rも心臓・血管に作用する薬)

菊池 昭博 59回生

諏訪人の意気を示めそう御柱
野山は競演 今盛りなり
丸山 茂夫 59回生
四十八年振りに故郷に戻りました。定年になって気がつく縁かな
帰去来を口ずさみつ、畠仕事

福島 清 60回生

昨秋、94歳で父が死去。約五年間、週末に帰郷して一緒に生活。自らの老後と重ねて人生を考えています。

小泉 和真起 61回生

貧さばらぬ生計の日々や青田風
中村 功 61回生
豆飯や年に一度の検診日(健康)
春風や妻と連れ立つ諏訪湖畔(慈愛)

秋澄むやバレーボールの空に舞ふ
(仲間)

五味 秀夫 63回生
健康と介護になると盛り上がり

亘理 美代子 63回生

○スイッチを入れれば小さくピと応え亡き子の部屋のエアコン動く
(平成14年度NHK全国短歌大会特選)

笠原 碩昭 64回生

○芽吹きそむ櫂をゆらす風に乗り御柱祭の木遣聞こゆる
○春の海夫も亡き子のこと言わず
(平成14年度のNHK全国俳句大会秀作入選作)

宮坂 いち子 64回生

移り行く日々を心に憶えつつ
今ある絆を確かめており
小口 俊吉 66回生
元気で還暦御柱を迎えました。そこで一句、
五月雨よいさよいさの金御敵

大島 一美 71回生

通勤の電車の中の平和の囀
携帯メールと白川夜船―故郷でも同じかな? 帰郷を真剣に考える年齢になりました。

坂下 昭 71回生

三十数年ぶりに「流浪の民」を歌うことになった。自分も転勤転居を繰返す「流浪の民」だった。人生の最後をどこで過そうか、目下思案中である。

濱 貴子 71回生

「笑い」です。一度きりの人生いつも笑顔忘れず過ごしていきたいと思っています

林 直嗣 71回生

後何年生きられるかと考える世代になりましたが、残す価値のあるライフワークに取り組みたいと思います。

林 春幸 73回生

五月雨に光る御柱氏人の波
(さみだれに ひかるみはしら ひとのなみ)

飯田 明 75回生

死をむかえた時、少しでも悔いが少ない人生を送ったと感じるためにはどのように生きるべきか考えています。

藤森 京子 83回生

縁とタイミング。
知らぬ間に情報ネットに取囲まれている昨今。だからこそ人との出会い、話す場を大切にしたい。

山田 陽一 84回生

庭花が
家族の笑顔
運ぶ春
原 智子 89回生
小さな「祈り」は何と無力だろうと感じるが、それでも「平和」を信じていることが大切だと、私は信じ続けている。

笠原 健一 92回生

15年振りに故郷での生活を再開。同窓生の活躍に身が引き締まる思い。同窓会のつながりを大切にしたい。

特集 今を生きる

③清陵生は今

清陵一日入学体験記

清陵生は今何を考え、どんな学校生活を送っているのだろうか。第十三号の高林・吉川両先輩にひきつづき、七一回生、三橋・原が五月二五日、清陵高校で一日を過ごした。

三橋ひさ子

(七一回 小学校教諭)

朝十時上諏訪駅

私たちが授業を参観するという話を聞いて、清陵高校の先生方はいやがったそう。同窓会から、それも現職の教員がやってきたら煙たいだろうなあと思う。いやがられないように、目立たないように、謙虚な態度で一日すごそうと何度も心の中でくり返ししながら原勝美氏と清陵に向かった。



今年の清陵祭アーチ 2004.7.4
撮影 土橋和男氏 (七二回)

角間橋をわたったあたりの風景は昔のままだった。道はこんなに狭かったり、道を登って右折すると、校舎のあったところはグラウンドになっており、その向こうに立派な校舎が見えた。ああ、時代は変わってしまったのだ。しかし、校長先生は優しく私たちを迎えてくださり、教頭先生は細かく一日の日程をつくってくださっていた。

六十五分授業

まずは英語。私は三年生の山田ゆりさんに付き添ってもらって、英語四番

と思いついてはいるうちに時間が過ぎてしまった。生徒は丸つけをして提出している。

次は別のテキストだ。生徒たちは読んで訳しはじめた。入試問題だ。英文はわかりそうでわからない。生徒たちの声の小さいのが気になったが、それなりに訳していく。予習してないと無理だと思ふ。参ったなと思つて周りを見回したが、生徒があまりに真剣で身動きひとつしないので、思わずうつむいてしまった。

驚くのは生徒の集中力である。他の授業でもそうだったが、六十五分間、居眠りをしたり、私語を交わす者が一人もいなかった。小学校では文字の教材だけで四十五分もたすことはできない。だから視覚や聴覚に訴えたり、作業をとり入れたりする。講義形式で授業が成り立つという事は、生徒の理解力と集中力の高さを示している。

私のために先生は、自分のテキストをコピーして下さったのだが、ぎっしり書き込みがしてあった。先生も一生懸命。生徒も一生懸命。

時間が終わりに近づいてきた。先生が文章を読み、生徒も声を出して朗読する。私も一緒に読んでみると、よくわかるようになっていた。私の英語力も一時間分レベルアップしたのかもしれない。それにしても轟先生の発音は素晴らしかった。教頭先生の話では、TOEICでも高得点を取っている実力のある先生だそう。歳は二十六歳と聞いてそれも羨ましかった。

昼食をはさんで四時間目は小高先生

の古典。よくわかるていねいな授業だった。

五時間目は駒瀬先生の世界史で、ドイツの統一についてだった。選択の関係か生徒は八人。フランスのアルザス・ロレーヌがドイツに割譲される話が出てきた。先生は、ドレーの「最後の授業」を知っているかと生徒に尋ねたがだれも知らなかった。「最後の授業」は昔小学校の国語の教科書に載っていたが、話自体に問題があるという事で削除されたから久しい。八人の生徒が特に不勉強だったわけではないと思う。国家と言葉の問題は興味深いので、詳しく話を聞きたかった。そして生徒の意見も聞いてみたかった。生徒たちはよく学ぶが、全体的に受け身なのではないか。知識の量が増えても問題意識が刺激されないと認識は深まっていかない。



学友会、新聞委の生徒たちと
手前中央左より、三橋、原の両名

さわやかな若者たち

あつという間に四、五時間目が終わり、四時から学友会総会を見学した。会長の辞退演説会だそう。生徒だけで整然とやっているのは伝統かもしれない。

その後、学友会の役員と新聞委員会の生徒たちが校長室に集まってくれた。第一印象は「さわやかな若者たち」。私たちが一年生の頃の学友会長は、ひげ面、学生服、腰には汚い手ぬぐいがぶら下がっていた。

驚いたのは八人のうち、二人がアメリカ留学経験者だったことだ。アメリカで何を学んだかと聞くと、「しゃべり英語と友だち」「生活の中にあるキリスト教の影響」「日本人にはない心の広さ」などの答えが返ってきた。「勉強」も大切だが、そういう体験は貴重だ。

世界に目が向き始める一方で地方会もまだ存在している。彼らは昔の地方会のように話を聞きたがった。原氏は熱く、長く語っていた。最近では会を開くときに参加名簿を学校に出す。親が学校に苦情を言うこともあるらしい。生徒が親に言いつけると聞いて、「へーと驚いたが、社会の中で清陵だけが例外のほうはない。

千葉行き「あずさ」に乗れなかったらどうしようかと焦りながら、五時半近くまで話をした。私は清陵時代にもう一度戻りたいとは思わない。しかし清陵が懐かしいことは事実だ。思いはつきないが、清陵生はその時代の清陵で精一杯学ぶしかない。

清陵は生まれ

変わるのか

原 勝美

(七一回 高校教諭)

長野県が「教育改革」に取り組んだ

長野県が「教育改革」に取り組んだということは、ニュースで聞いていたが、関校長先生、堀金教頭先生から、清陵の現状を伺い、あわせ考えると、今母校は大きく動き始めていると感じざるを得なかった。田中康夫知事の影響がどれほどかはわからないが……。

時間の流れについては多少前後するかもしれないが、現状をまとめてみる。

まず、学区変更で、事実上全県一区

になり、高校入試が、前期後期二本立てになったこと。前期は推薦入試で、面接などのほか、学校独自の問題も出される。したがって、広い範囲に受験生を集める工夫が求められるようになっていて、学校の特色、独自性が求められるようになってきている。

また、教員の異動が、3、6年と早くなっている。(その学校に必要とされる人間は残れるという。逆に言えば、使えなかったり、批判的な人間はさっさと追い出されてしまう。現場教師の実感として、これでは教師の主体性は出しようがないし、求められてもいない。県教委の方針、管理職の意向で学校運営が行われ、生徒は効率、出来具合を競わされるお客さん以外の何ものでもなく、教師ともども物言わぬ



従順なものが求められるだろう

清陵独自のもの

・SSH(スーパーサイエンスハイスクール)の指定を受けたこと。
(初年度26校のうちの一校と)
・授業時間が65分に延長されたこと。

・二期制導入

これを見ると、清陵は、しっかり授業時間を確保し、質の高い授業を行っている、他校に真似できないカリキュラムを整えて、進学実績をあげることが目標とし、受験生を集めようとしているように見える。そうか、これは最先端を行く学校ではないか!

清陵生の今

さて、私の「一日体験入学」に用意されたクラス(講座)は、その先端を行くSSクラスであり、案内人として

指名されていたのは、学友会の会長、副会長を歴任し、端艇部員でもある丸山悠太郎君であった。

丸山君の案内のもと、例によって教室を移動しつつ、昼食をはさんで、三時間(一九五分!)の授業に参加させてもらった。先に昼食のことを書くのは、校舎の真ん中にある大階段で、ここにカラフルな装いの清陵生が、三々五々お昼を食べているシーンは、のどかで開放的でいいものであった。

三年生のSS講座一期生は、二十一人。(一人欠席、女子五人?)少人数で、全員が集中して、濃い時間が流れていて、どの先生(数学Ⅲ牧島先生、現代文篠遠先生、生物小池先生)も時間を無駄にせず、きっちり授業を進めていく。今まで三十年余り教師生活を



しているが、こんな授業はあったらどうか。一瞬、一度でいいからここで授業をしてみたいと思ひ、この授業には、教材研究に二倍時間がかかるなあと思ひ、先生方の「いかがですか?これはどうですか?」という問いかけに、次第に違和感を覚え始め、それに答える生徒を見ているうちに、どうして生徒は、こんなに協力的、共感的に授業に参加しているんだろうと思うに至った。

私自身の生徒、学生時代、教師は大人であることだけで、まず批判の対象だったし、授業内容、人物ともに無条件に尊敬できる教師など、ほとんどいなかった。教師になると当然報いを受けて、不信のまなざしや、居眠り、おしゃべり攻撃を受けつつ、だからこそ、何とか彼らのなかに切り込み、自分の言葉で考えることや、受け答えを面白がってくれないかともが日々を繰り返している。

この穏やかな共同作業を見ていて、両者の目標が一致しているんだと思うしかなかった。そしてそれは、「いい大学」に合格することで、そこで生徒たちは、「大人」の関係を築いているとも。

勿論、そのことを否定するつもりはない。私自身、生徒に協力は惜しまない。しかし、授業で、問題演習的な知識、問題解決技術を教えようと思っただけではない。高校の授業でやるべきものと根元のことがあると思っただけからだが、現代文の授業では、生徒のスピーチ

や感想を使つての「発表」もあった。みんな大人の反応で受け止めていて、突っ込みはなかった。それは放課後の、学友会長選挙の辞退演説、出馬表明でも、全く私語・野次・突込みがなくてびっくりしたことも通ずるかもしれない。うーん、いまだこんな高校生がいるんだ!しかし……

高校生がどうあらねばならないか、そんなことを求められたって彼らは知ったことではないだろう。自分の高校時代を美化し、絶対化しても仕方ない。高校教師をしていて願うのは、彼らが自分の可能性を広げてほしい、遠くまで行かれる基礎力(学力だけではなく)をつけてほしい、ということぐらいだ。SSHになって、広中平祐氏、養老孟司氏らをはじめとする学者・研究者の講演、シンポジウム、大企業との連携で、現代の先端を行く知識・情報に触れる機会に恵まれていることも確かだ。報告集を読ませてもらうと、彼らに大きな刺激となつていることも事実だ。それが、彼らの深いところを、彼らを動かしてくれることを願ひ、そこから彼ら自身の問いかけが始まることを願うだけなのだ。

丸山君はじめ、最後に話す機会があった学友会、新聞委の生徒諸君の前向きな姿勢には好感を持った。自己への問いかけは自分でするしかない。私の場合、それは清陵という場で、友の刺激のなかで始まった。いろいろなものが与えられ過ぎていなければいいが、とも思いつつ、多くの思いを持って、あわただしく母校を後にした。

病理学の第一人者

飯島宗一氏逝去



広島大学・名古屋大学の学長を歴任、病理学者として知られ、また反核・平和運動にも多大の貢献をした飯島宗一氏(四一回)が、本年三月一日逝去された。八十一歳だった。

岡谷市出身、諏訪中学から旧制松本高校、名古屋大学と進み、優れた病理学者であった名古屋大学と進み、優れた病理学者であった

一方で、土屋文明氏門下の歌人としても知られ、「水薦菫」と題する歌集がある。新年の宮中歌会始で召人を務められたこともあった。

先年、元東京支部長増澤謙太郎氏が逝去された折、諏訪中学時代の親友でもあり、その後も親交が続いていたということで、名古屋から心のこもった追悼文を寄せられ、本紙第十二号に掲載された。

本号では、生前の飯島氏をよく知るお二人、諏訪中学時代の同期生で、飯島氏が名古屋大学医学部時代に親交のあった小口眞氏(四一回)と、著書刊行に際し、版元岩波書店の編集担当者として全面的に協力した片山宏海氏(五八回)に、ありし日の飯島氏のお人柄を偲んでいただいた。

命の恩人を偲んで

昭和二十七年五月私は帝国ピストンリング(株)の名古屋事務所に勤めていた。その頃体調を崩し、出勤しても椅子を横に並べて暫く横になって休んでからでないとい仕事を手につかなかった。飯島君は当時名古屋大学病院の病理学研究室に勤務していたので、諏訪中学で五年間机を並べた同級生の気安さから電話して事情を話したらすぐ来いといわれ、内科の先生と一緒に診て貰った。結核性胸膜炎と診断され即入院と

小口 眞(四一回)

いうことになったが病室の空気がない。私宅が名大病院から約一キロ位の所にあったので飯島君が「それなら俺が往診してやるから家で寝ている」という。翌日から新聞・ラジオ厳禁、絶対安静の闘病生活が始まると、飯島君は研究の合間を縫って毎日自転車で往診してくれた。だが一ヶ月以上過ぎても病状は快方に向かう気配すらない。彼は心配して私に「ストレプトマイシンを使ってみようか」というが俺の試験台

にならないか」という。その薬は頗る付きの高価薬で庶民の手には届かないという認識が当時一般的であった。剰さえその頃は口に糊するのに汲々たる生活で、私が倒れただけでも家族が干渉するのはないかとの恐怖感に苛まれていた時なので、それは無理だといふと、彼は「健康保険はきかないが研究試験患者になれば研究費が充当出来るのでお前に負担はかけないから心配するな」というのである。それで私は「命預けるからよしなに頼む」とお願いした次第である。

ストマイを打ち始めてから、六〇年

原爆災害誌と清陵コンピ

飯島宗一先生が残された数々の大きな足跡のなかでも、被爆者の病理学的研究に始まる反核・平和問題への発言と貢献は、特筆すべき大きなお仕事であったといえよう。そしてその中心に『広島・長崎の原爆災害』(岩波書店、一九七九)の編纂・執筆がある

これが困難を極める仕事であることは、当初から容易に推察された。広島市、長崎市から依頼されたとき、広島大学長の劇務にあった飯島先生があえて引き受けられたのは、「業火のなかで命果てた人々の、平和と生への切ない願いを思う時、この仕事は、私達の怠ることのできない至上の義務である(読売新聞、一九七九・七・二八)との思いがあったからであろう。詳細は省くがこの大部の本を企画か

ぶりの猛夏を凌ぎ、規定単位を打ち終った秋には平熱に戻り食欲も進んで元気を取り戻し、殆ど無償で生を得ることが出来たのである。

飯島君は正に文字通り私の「命の恩人」なのである。

彼の医学者、教育者、文化人、歌人、そして政治的功労者としての華麗な業績はメディアを通じて広く知られているが、その陰に「医は仁術」に徹した市井の実践者として、いぶし銀のような彼のひととなり的一面に限りない敬愛と深い感銘を覚えるのである。

片山 宏海(五八回)

ら刊行まで正味二年間という驚くべき短時間で完成せしめたことは、まさに驚異的である。飯島先生の文字通り血の滲むような尽力がなければ、とても完成には至らなかつたと断言できる。こうして上梓された『広島・長崎の原爆災害』は刊行以来、その英訳書とともに世界でもっとも信頼のおける原爆災害白書として使命を果たしてきた。

私は出版社側の編集担当者として飯島先生のお手伝いをさせて頂いた。敬愛する大先輩と共にこの仕事に従ったときの思い出は、私にとって生涯の宝となっている。二例をご紹介します。

ある編集会議の席上、飯島先生から突然雷を落とされたことがある。A先生がお配りになった原稿をかざして、「片山君！こんな小学生の作文のご

ときを会議に掛けるとは一体何だ！」一瞬呆気にとられたが、当のA先生の満面朱の顔を見て、咄嗟に答えた。

「申し訳ありません。手違いでまだ

推敲してない原稿をお配りしてしまいました。いったんお戻し頂いて、次の編集会議でご検討をお願いします」

「ウム、そうしてくれ。編集部はもつとしっかりしてくれなくては困る」会議のあと二人きりになったとき、タバコの煙の向こうから、あの人なつこい笑顔が語りかけてきた。

「さっきは済まなんだ。直接A君を爆撃するのは気の毒だったもんで」

「分かってます。私を爆撃することであの原稿をボツにしてみました」

この出来事は二人の間で永く語り草となった。清陵コンピゆえにできた連携プレーはその後も大いなる力を発揮し、幾多の難局を乗り切ることができた(信濃毎日新聞「原爆災害と日本の科学」、一九七九・七・二八)。

この本と清陵を巡ってもう一つ、没し得ない偶然がある。清陵時代私が岡谷塩嶺療養所に入院していたときに、三沢勝衛先生の次男三沢春郎さんも同じ病棟に入院しておられ、たいへん可愛がって下さった。その春郎さんを飯島先生が見舞いに訪れたことがあると言われ、写真を見せて下さった。これは当時の療養所長白井寛先生が若い頃広島で行なった被爆者救護と病理解剖の記録を同書に採録する際に判明した話であり、もしかしらそのとき、病棟の廊下で飯島先生とすれ違っていたかも知れない。(二〇〇四・六・八)

第十回「女性のつどい」へのご案内

長田宏子 (六二回)

女性のつどい第九回は「講演と音楽を楽しむ午後のひととき」と題し、二〇〇三年十一月二十九日(土)原宿のアカスタジオで開かれました。総勢四八人の皆様と実り多き時を過ごすことができました。林会長、小川、藤森副会長、事務局の金子様、諏訪からも三名のご参加をいただきました。

講演者の内田良子さん(六四回生)との打ち合わせは、内田さんが主催しておられる「モモの部屋」でした。門を入ると敷石の両側に白ツメ草やバラ等が咲く小道が続く、木と土と紙で創られた天井高い和室では心が安らぎ会話が弾みました。「不登校とひきこもり」という重いテーマの講演でしたが、多くの事例に基づく内田さんの暖かくユーモアのある語り口に救われる気がいたしました。

ピアニスト今井紀子さん(七一回生)は、シューマンの「子供の情景」



会場で講演をする内田良子さん

より数曲と、リストの「ため息」の素晴らしい演奏を聴かせてくださいました。イタリアに留学され、現在はベートゥヴェンのソナタ全曲演奏に取り組みながら信州、東京と、演奏活動をなさっています。



ピアニストの今井紀子さん

懇親会の立食パーティーではイタリアのクリスマス菓子パネットーネをいただきながら和やかな交流のひとつを過ごしました。

第十回東京清陵会女性のつどいは、「看護学教育と私の自立」をテーマに金子道子さん(五九回生)のお話を伺います。職業人として、家庭人として、四十年以上を過ごしてきた御自身の軌跡をお話しいたします。金子さんは現在も大学、大学院で教えていらっしやいます。

日時は二〇〇四年十一月二十日(土)午後一時~四時、場所は南青山会館(予定)、会費三千円でを行います。(第十回幹事、林俊子(七三回生)、長田宏子(六二回生))

第十六回南信同窓連親睦旅行

一五十年ぶりの再会

吉田 嵩(五八回)

十一月二十一日(金)、二十二日(土)の一泊二日のバス旅行が、諏訪美・富士見・下伊那農の幹事校により行われた。五十年前に創設された阿南高校漕艇部から参加者があると聞き、端艇部の宮坂喜代司君と一緒に初参加した。一日目は諏訪大社上社、霧ヶ峰、別所温泉・北向観音、安楽寺などを見学したが、霧ヶ峰は文字どおり霧の中何も見えず残念だった。

上山田温泉千曲館での宴会の席はくじ引きだったのに、阿南漕艇部のコックス林照美氏と隣り合せて座ることができた。当時私も清陵端艇部のコックスを務めていた。五十年前平岡ダムが出来たのをきっかけに、阿南高校に漕艇部が作られた。ボートを購入したものの指導者はおらず、清陵端艇部が頼まれて三名が二泊三日の指導にいった。その翌年には清陵と阿南がインターハイに出場し、瀬田川で再会することが出来た。その後阿南漕艇部はめきめきと力をつけ、清陵のよきライバルになった。当時の阿南漕艇部七名のうち五名が他界し、平岡ダムの堆砂により漕艇部も活動を停止しているという。清陵端艇部九名のうち中澤澄行君など二名が他界している。五十年の歳月の流れを語り合った。

二日目は、松代真田邸、川中島合戦場跡、善光寺などを見学した。一日目は雨模様であったが、二日目は好天に恵まれ、楽しい旅行になった。九十八歳になる依田八治氏の参加にも驚いた。参加者六十名のうち、東京清陵会からは六名が参加した。

南信同窓連、東京同窓連の活動状況について

東京清陵会会長 林尚孝(五二回)

南信同窓連親睦ゴルフ会

第二八回ゴルフ会は、一月二日(日)香取カントリークラブで八校一四名によって行われ、第二九回ゴルフ会は、四月二日(月)千代田カントリークラブで四校七名が参加して行われた。優勝は共に諏訪清陵の森元功氏(五九回)であった。

優勝者が次回の幹事役となるため、次回も森元さんが幹事を務められる。第三〇回ゴルフ会は十月三日(土)に開かれるので多数の参加により、森元さんを盛り上げて頂きたい。

東京同窓連四十年記念祝賀会

二月七日(土)午前十一時からアルカディア市ヶ谷「富士の間」において、新年会を兼ねて四十年記念祝賀会が開かれた。

第一部では、岡谷工業高校バレー部壬生義文監督による「夢への挑戦」子供らと共に「かんだ日本」と題して、記念講演が行われた。第二部の記念式典では、中藤照美会長の挨拶、羽田泉学生会会長・青山誠真高校校長会副会長の祝辞などのあと、四〇年の歩みが報告された。第三部では、鏡割り

杯、各地区からの催物として祝舞「長唄・松の緑」、御柱祭長持唄などが出され、最後に「信濃の国」を全員で大合唱し、散会した。参加者は過去最大の三四九名であり、東京清陵会からも十名が参加した。

なお、「記念誌『温もり』」が当期刊行され、無料配布された。

南信同窓連総会

六月一九日(土)一五時から虎ノ門パストラル本館五階特別会議室において、平成十六年度定期総会が開かれた。定例議案が審議されたあと、役員改選が行われ、新会長に有賀守人氏(辰野)、副会長に古屋俊郎氏(岡上)、原長志氏(下伊那農)、監事に有賀有勝氏(伊那北)が選任された。中島森利南信高校会会長、中藤照美東京同窓連会長、吉田一成南信同窓連顧問から祝辞があった。

懇親会は、新館八階ロゼの間に移り、依田八治顧問の乾杯のあと、幹事校による余興と続き、全員による「信濃の国」の大合唱で、盛会裡に閉会した。参加者は六三名、東京清陵会から四名が参加した。

なお、本総会により東京清陵会から選出されていた南信同窓連会長としての二年の任期は無事満了した。

東京同窓連総会

七月三日(土)一二時から日本教育会館「平安の間」において、第四〇回定期総会が開かれた。第一部総会では、定例議案が審議さ

れたあと、役員改選が行われ、新会長に向井洋氏(軽井沢)が選出された。高野忠夫高校校長会長、尾科正誼県人会連合会専務理事の祝辞があった。

第二部懇親会は、中藤会長挨拶、依田顧問の乾杯のあと、余興・演芸と続き、全員による「信濃の国」の大合唱で、盛会裡に閉会した。参加者は二三

二〇〇三年度 東京清陵会総会・懇親会報告

久保田 功一(七〇回)

第三十七回の東京清陵会定期総会・懇親会は、平成十五年十月十七日(金)六時からアルカディア市ヶ谷(私学会館)で百六十八名が出席して行われた。総会に先立ち、物故会員の冥福を祈り鎮魂歌の流れる中で黙禱を捧げた。総会は一瀬益夫氏(70回)の開会の言葉が始まり、来賓の諏訪清陵高校同窓会長宮坂久臣氏、諏訪清陵高校校長石田弘一氏からご挨拶を頂いた。



八名、東京清陵会から五名が参加した。

なお、本総会により東京清陵会から選出されていた東京同窓連副会長としての二年の任期は無事満了した。

回り役期間中の二つの同窓連の活動は多岐にわたった。詳細は会務報告をご覧ください。

(70回)とダンスパートナーの優雅な姿に出席者の目は釘付けとなった。懇親会の大取りは大鼓にあわせての「日本一長い校歌」の斉唱。この歌を一番の楽しみに総会・懇親会に参加なさる方もいらっしやるとか。今年も大きな歌声が会場にひびきわたった。

しめは、大島道雄氏(71回)の次年度に向けての力強い閉会の言葉、そして万歳三唱でお開きとなった。

最後に幹事としてのお礼や感想などを少し述べさせて頂きます。まずは、当番学年として一年以上にわたって企画・運営に当たって頂いた七十回生の皆様、本当にありがとうございます。

た。これを機会にまたお会いしましょう。また、支えて下さった六十九回生の皆様、事務局の皆様、お世話になりました。今回は総会がスムーズに進み、懇親会に時間的な余裕をもてたことはとても幸いでした。

しかし、出席者数が近年では初めて二百名を下回ったことは大変気にかかっています。「現況報告」にも見られるように、会員数が七十回生辺りを境に急減している影響も大きいと思えます。今回の出席状況は、東京清陵会の後継組織運営に改めて課題を示したのではないのでしょうか。

それでは会員の皆様方、またお会いできる日を楽しみにしております。

二〇〇四年度 同窓会本部定期総会報告

久保田 容子(七一回)

同窓会本部定期総会が六月二十六日、ホテル紅葉で開催された。梅雨の晴れ間に恵まれ、当番幹事七一回生(渋谷利明代表)の尽力で過去最高の三七五人が出席、大盛会となった。

総会は武井恵子さん(71回)の司会で物故会員へ黙禱を捧げ、宮坂久臣会長、関哲夫校長が挨拶。議事では▽十五年度会務報告・決算▽十六年度事業計画・予算▽創立一〇周年記念事業では来年五月を目指し「会員名簿」五千部刊行▽役員改選は宮坂会長、有賀裕副会長が勇退。新会長には林尚孝氏、副会長は茅野實、淵上良子両氏と新任の岩田昌久、今井正喜両氏を満場一致で承認。湖周マラソン三〇回出場

の井上彦治氏(42回)を表彰した。続いての「日本経済の反転と諏訪地域」と題した記念講演会では、矢崎和広・茅野市長(68回)と伊藤洋一・住

信基礎研究所主任研究員(71回)が対談。当日各紙が「国の債務残高七〇三兆円」を報じる中、タイムリーなテーマで県を代表する行政の実力者とマスコミで活躍中の論客の登場に立ち見の盛況ぶり。伊藤氏は、過去十年のデフレ・低金利の終焉で新たな成長パラダイムに入ると日本経済を予測。一方矢崎氏は、諏訪地域から企業の撤退が相次ぐ現況を工業規模の推移など具体的な数字で示し、「日本経済の反転の方途を探る」と論じた。今春上海など中国の四大都市を取材した伊藤氏は「目覚ましい経済発展を遂げる中国だが、学習能力は高いが創造力に欠ける。中国に進出した工場の限界が見え始め、日本へ諏訪へと帰ってくる。企業にフレンドリーであることが地域の発展の鍵」と応えた。両氏の諏訪への熱い想いが伝わる対談となった。

引き続き林尚孝会長を議長として議事の審議に入り、今年度会務・収支・監査報告、次年度事業計画・収支予算案、中澤澄行氏(58回)の逝去に伴う小川勝嗣氏(59回)の副会長就任などが満場一致で承認された。

総会に引き続き行われた懇親会の進行役は飯島由美子さん(70回)。毎回恒例の「真澄樽酒」の鏡割りは、名川方敏氏(36回)、村上利雄氏(39回)、次年度幹事の太島一美さん・今井紀子さん(71回)、さらに「東京清陵会だより第十四号」の編集長として

尽力頂いた水野谷真一氏(70回)によって行われた。乾杯の音頭は、元会長の小平祐氏(42回)をお願いをした。

懇親会を盛り上げた出しもの一つは木遣り。御柱祭を控えて山田厚氏(諏訪七十回幹事)のご厚意で「諏訪市木遣り保存会」の三名の方が上京して下さった。祭り支度・おんべを手に本番に先駆けての木遣りには、会場から「よいしょ、よいしょ」のかけ声が何度もかかった。もう一つの出しものは社交ダンス。音楽に乗り広い会場いっぱい軽やかに踊る田村志げ子さん

「日本経済の反転と諏訪地域」と題した記念講演会では、矢崎和広・茅野市長(68回)と伊藤洋一・住



会場を移して初のミニコンサート。ピアノスト・いまいのりこさん(71回)がショパン「ノクターン遺作」など三曲を演奏。心に響く調べが大きな感動を呼んだ。続いて、故樋口理先生(30回)を偲んで結成された「オケさ記念合唱団」今回限定公演は「流浪の民」など三曲を披露。歌姫・竹内咲子さん(71回)が登場、本番を最高の出来映えて飾り喝采を浴びた。懇親会では久々の再会に笑顔が弾け、旧交を温めた。宮坂会長の胴上げ、次回幹事学年七十二回生の音頭で校歌斉唱、最高潮の盛り上がりの中、閉宴した。

二〇〇三年度
東京清陵会会務報告

二〇〇三年

- 7・18 東京同窓連正副会長会 日本教育会館 一名出席
- 8・9 財政問題検討小委員会 河合会計事務所 事務局五名出席
- 8・22 東京同窓連創立四〇周年記念実行委員会 日本教育会館 一名出席
- 8・22 東京清陵会 定期預金口座「みずほ銀行九段支店」分解約
- 8・27 幹事会 南青山会館 三五名出席
- 9月初旬 東京清陵会会報第一四号発行
- 10・2 東京同窓連創立四〇周年記念事業実行委員会 一名出席
- 10・17 第三七回定期総会・懇親会 アルカディア市ヶ谷 担当幹事学年七〇回生、出席者総数一六八名
- 11・1 第二回事務局会議 神田シティホテル 五名出席 総会・懇親会の反省、会報のありかた、会議日程、事務局体制、ゴルフ会、財政問題
- 11・1 第二八回南信同窓連ゴルフコンペ 香取カントリークラブ 一名参加
- 11・18 東京同窓連創立四〇周年記念事業実行委員会 一名出席
- 11・21、22 第一六回南信同窓連親睦旅行会 戸倉上山田温泉 五名参加
- 11・29 第九回女性のつどい 四七名参加

- 12・11 南信同窓連忘年会 新宿レガ
- ル 三名参加

二〇〇四年

- 1・15 南信同窓連新年会 新宿レガ
- ル 五名参加
- 1・17 事務局会議 神田シティホテル 五名出席 会費納入状況、人名録、事務局体制、寄付について
- 1・22 東京同窓連四〇周年記念事業実行委員会 アルカディア市ヶ谷 一名出席
- 1・23 七一回生キックオフミーティング 神田シティホテル 一七名出席
- 2・7 東京同窓連創立四〇周年記念祝賀会・新年会 アルカディア市ヶ谷 一〇名参加
- 2・7 本部同窓会 常任幹事会・幹事会 清陵会館 一名出席
- 2・13 会報第一回編集会議 神田シティホテル 一六名出席
- 3・12 会報第二回編集会議 中央印刷 一〇名出席
- 3・26 総会担当者会議 神田シティホテル 九名出席
- 4・12 第二九回南信同窓連ゴルフコンペ 千代田カントリークラブ 一名参加
- 5・7 南信同窓連正副会長会 新宿ラコンテ 一名出席
- 5・13 南信同窓連常任理事会・理事会 新宿ラコンテ 一名出席
- 5・14 会報第三回編集会議 中央印刷 一三名出席
- 5・15 事務局会議 神田シティホテル 七名出席 二〇〇四年度活動計

- 画、事務局体制、会費納入状況他
- 5・28 総会担当者会議 神田シティホテル
- 6・18 会報第四回編集会議 中央印刷 一二名出席
- 6・19 南信同窓連総会 虎ノ門パス トラル 四名出席
- 6・26 平成一六年度諏訪清陵高校(旧制諏訪中学校)同窓会定期総会ならびに懇親会 ホテル紅や 東京清陵会から、会員、顧問、会長、他役員等多数参加
- 7・3 東京同窓連第四〇回総会 日本教育会館 五名出席
- 7・7 常任幹事会 南青山会館 一
- 九名出席

二〇〇四年度
事業・行事計画(案)

- 一、第三八回定期総会・懇親会の開催 一〇月一五日(金) アルカディア市ヶ谷 幹事七一回生
- 二、「東京清陵会だより」第一五号の発行
- 三、「東京清陵会人名録二〇〇一年版」の販売促進
- 四、第一〇回「女性のつどい」の開催
- 五、東京清陵会ゴルフ会の開催
- 六、常任幹事会、学年幹事会、事務局会議の開催
- 七、同窓会本部事業への協力
- 八、郷里同窓会関係団体(東京同窓連、南信同窓連)への参加

2003年度収支決算報告(案)

自2003年4月1日至2004年3月31日 (単位:円)

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
総会費用	1,226,157	総会会費	1,312,000
会議費	144,137	会員年会費	401,000
諸会費	67,500	寄付金	73,000
通信費	849,218	受取利息	608
印刷費	350,543	雑収入	21,185
事務雑費	211,827		
会報費	629,160		
予備費			
次期繰越	7,281,132	前期繰越	8,951,881
合計	10,759,674	合計	10,759,674

2004年度収支予算(案)

自2004年4月1日至2005年3月31日 (単位:円)

支出の部		収入の部	
科目	金額	科目	金額
総会費用	1,400,000	総会会費	1,600,000
会議費	150,000	会員年会費	600,000
諸会費	70,000	会議費負担金	60,000
通信費	800,000	寄付金	50,000
印刷費	350,000	受取利息	5,000
事務雑費	220,000		
会報費	700,000		
予備費	50,000		
次期繰越	5,856,132	前期繰越	7,281,132
合計	9,596,132	合計	9,596,132

(注) 2004年度予算の収支差額は1,425,000円不足します。

東京清陵会事務局所在地
連絡先変更のご案内

東京清陵会事務局所在地は本年9月1日を以て下記に移転しましたのでご案内申し上げます。

新住所 〒101-0047 千代田区内神田
3-24-5 神田シティホテル気付
TEL 03-5680-7633
FAX 03-5680-7665
E-mail tseiry@papiacargo.co.jp

東京清陵会
人名録

2001年版

申し込み方法:
郵便振替えにてご送金ください
一週間程でお手元に届きます。
00170-8-12344
加入者名:東京清陵会人名録

B5版 444頁 頒価3,000円(送料込)



「清陵出版会」のお知らせ

出版業界の仕事に携わっている諏訪清陵高校同窓生が集い、交流・親睦を深める「清陵出版会」は、2000年に発足、今年で5年目になります。

旧交を温めるため、また人脈を広げるため等々で、一度参加してみたいと思う方は、是非、ご連絡ください(年会費等はありません)。

●代表幹事/林 秀幸(73回生) ●事務局/清水信次(84回生) 連絡先: 03-3518-2385

計 報

謹んで哀悼の意を表し、ご冥福をお祈り申し上げます。(敬称略)

氏名	年次	逝去年月日
太田 和夫	(24回)	2004. 6. 8
伊藤 多平	(27回)	2003. 2. 25
畑 治	(30回)	2003. 5. 7
林 清市	(30回)	2004. 5. 20
高林 光男	(31回)	2002. 4. 3
三輪 協	(31回)	2003. 3. 14
関 毅	(32回)	2002. 12. 12
小林 千鶴	(34回)	2003. 9. 1
植松 健悟	(35回)	2003. 4. 21
加藤 幸男	(35回)	2003. 5. 1
金子 正己	(35回)	2002. 3. 22
外野 充穂	(35回)	1999. 5. 9
柳平 忠	(35回)	2002. 12. 20
有賀 正治	(36回)	2002. 9. 15
日野 魁	(37回)	2003. 6. 26
岩波 吉郎	(38回)	2003. 7. 15
花岡善一郎	(40回)	2002. 11. 26
細田 實平	(41回)	2003. 10. 30
宮坂 久信	(42回)	2003. 4. 23
吉江要之進	(43回)	2002. 7. 10
後藤 賢蔵	(44回)	2003. 9. 2
五味 久夫	(44回)	2002. 9. 29
土橋 光彦	(46回)	2003. 2. 5
小口 信吉	(47回)	2003. 12. 9
原田 勝	(47回)	2003. 4. 26
岩波 信之	(48回)	2004. 4. 22
小山 敏靱	(48回)	2004. 1. 15
片岡 保彦	(48回)	2002. 11. 7
小野 光俊	(50回)	2004. 4. 11
大木 靖衛	(51回)	2003. 1. 21
小口 明	(51回)	2003. 9. 8
鋤柄 重雄	(55回)	2004. 1. 15
増澤 高広	(55回)	2003. 12. 5
山田 健彦	(57回)	2003. 4. 27
帯川 昌彦	(58回)	2004. 1. 6
金子 正敏	(58回)	2004. 4. 4
中谷 信	(61回)	2003. 11. 24
笠原 修	(63回)	2003. 6. 25
林 俊男	(63回)	2002. 10. 29
藤森 泰	(63回)	2002. 11. 11
笠原 英明	(71回)	2003. 1. 26
湯田坂一利	(73回)	2003. 5. 5

(事務局に連絡が入った方)

危機的財政状況克服のために会費納入を

東京清陵会の現況 会長 林 尚孝

データベースから東京清陵会の現況をみると次のとおりである(二〇〇四・五・一三現在)。

一、東京清陵会会員の定義

(1)首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉、群馬、栃木、茨城)在住の同窓生(ただし、退会申出者を除く)。
(2)転居して首都圏を離れたが支部会費を納入している同窓生。

二、会員現勢 総数三、五二八名(住所不明者七九四名を除く)

(1)都県別会員数
東京都一、六八二名、神奈川県七一六名、千葉県四三二名、埼玉県四二四名、茨城県七五名、群馬県二六名、栃木県二二名、その他一五二名
(2)年次別会員数(別表1)
三、会費納入状況(二〇〇二・四・二〇〇五・三会計期)

(1)納入者総数 一、六三五名
(2)年次別会費納入者数(別表1)
(3)年度別納入額及び人数(別表2)

別表2に明らかなように、納入者の傾向にある。別表3に示したように、九年前で会員数は約一四％減少し、所在不明者は四倍弱に増加している。財政状況の悪化にともない次期繰越金は、八百万円を割り込んだ。一九九八年の繰越金一六三三万円と二〇〇四年の繰越金七二八万円から見ると、年間約一五〇万円の繰越金減少状況にある。

五、同窓会活動の豊かな可能性

これまで、地域社会や家族の個への分解が進むにつれ、同窓会活動も同様に希薄化してきた。しかし、健全な個を保持していくためのコミュニティの重要性が、再確認されてきている。求められる多様・多層なコミュニティの中にあつて同窓会・同年会の

つながりには豊かな可能性を秘めている。経済合理性至上主義の現状であればこそ、益々同窓会活動の発展が期待されるのである。

六、会費納入のお願い

勿論、財政のバランスを取るために

は、活動状況を縮小するか、収入を増加させる以外に方法はない。現在の会費納入率は会費免除会員を除くと、四九％である。会費が完納されれば、四面の危機的状況は回避できる。本会の危機的状況をご理解頂き、未納会員の

別表1 年次別会員数と会費納入結果(5月5日現在)

回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)	回	現員	不明	計(費)
22	1	0	1(-)	49	107	4	111(66)	78	44	39	83(15)
23	0	1	1(-)	50	91	7	98(60)	79	39	27	66(16)
24	1	1	2(-)	51	102	8	110(72)	80	28	23	51(9)
25	4	1	5(-)	52	120	2	122(95)	81	37	17	54(10)
26	3	2	5(-)	55	29	0	29(19)	82	26	28	54(10)
27	4	1	5(-)	56	115	9	124(76)	83	39	51	90(21)
28	9	2	11(-)	57	121	5	126(86)	84	29	29	58(8)
29	0	2	2(-)	58	111	3	114(79)	85	35	40	75(13)
30	5	2	7(-)	59	108	8	116(70)	86	26	28	54(10)
31	10	2	12(-)	60	117	11	128(76)	87	24	19	43(2)
32	9	4	13(-)	61	101	14	115(70)	88	17	33	50(5)
33	10	3	13(-)	62	108	11	119(59)	89	15	39	54(6)
34	14	1	15(-)	63	111	13	124(76)	90	10	31	41(1)
35	19	2	21(-)	64	93	6	99(62)	91	11	28	39(1)
36	15	5	20(-)	65	88	5	93(46)	92	23	30	53(6)
37	14	2	16(-)	66	89	10	99(48)	93	9	14	23(1)
38	25	1	26(-)	67	103	13	116(44)	94	5	8	13(0)
39	29	3	32(-)	68	86	14	100(46)	95	4	7	11(1)
40	24	1	25(-)	69	107	14	121(53)	96	10	11	21(2)
41	47	2	49(-)	70	99	13	112(42)	97	2	3	5(1)
42	42	2	44(-)	71	90	10	100(33)	98	5	4	9(1)
43	52	2	54(-)	72	63	7	70(24)	99	0	1	1(0)
44	51	2	53(-)	73	64	11	75(26)	100	3	1	4(2)
45	55	2	57(-)	74	72	24	96(29)	101	4	0	4(0)
46	65	4	69(-)	75	48	18	66(16)				
47	66	3	69(43)	76	43	16	59(15)				
48	73	3	76(38)	77	52	21	73(26)				
								計	3,528	794	(1,636)

- 注 1) 現員：東京清陵会に登録されている会員で、所在不明者を除く
2) 不明：以前東京清陵会に所属して現在所在不明のもの
3) ()内は今会計期(2002.4~2005.3) 会費完納者及び前納者の人数、75歳以上(46回以前)の会員免除会員数508名
4) 会費納入者数1,636名と今期納入者数の差は終身会費納入その他による
5) 終身会費納入者総数1,228名(内60名死去、35名所在不明)

別表3 会員数と次期繰越金の推移

年	会員数(名)	不明者数(名)	次期繰越金(円)
1994	4,227	207	16,039,236
1995	4,265	238	16,073,199
1996	4,179	267	15,962,791
1997	4,068	329	15,008,425
1998	3,944	437	16,330,130
1999	3,797	546	15,191,116
2000	3,832	485	13,660,668
2001	3,628	649	11,499,913
2002	3,768	672	10,266,836
2003	3,630	767	8,951,881
2004	3,528	794	

- 注 1) 次期繰越金は各年の3月現在
2) 会員数、不明者数は各年の7月現在(2004年は5月現在)

別表2 年度別会費納入額および納入者数

前々期納入額総計(1992.4~1997.3)	10,936,585円	2,079名
内 訳		
1992年4月~	小計	4,351,185円 (1,021名)
1993年4月~	小計	2,090,400円 (353名)
1994年4月~	小計	1,428,800円 (236名)
1995年4月~	小計	1,855,600円 (289名)
1996年4月~	小計	1,210,600円 (180名)
前期納入額総計(1997.4~2002.3)	7,499,200円	1,371名
内 訳		
1997年4月~	小計	3,577,200円 (734名)
1998年4月~	小計	1,620,800円 (272名)
1999年4月~	小計	862,800円 (129名)
2000年4月~	小計	434,000円 (69名)
2001年4月~	小計	1,004,400円 (167名)
今期納入額総計(2002.4~2005.3)	1,352,200円	447名
内 訳		
2002年4月~	小計	951,200円 (314名)
2003年4月~	小計	401,000円 (133名)

ご協力を切にお願いする次第である。